
君は月を見ているか

神田春希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君は月を見ているか

【Zコード】

N5145R

【作者名】

神田春希

【あらすじ】

生まれた時から俺たちは三人で、それがいつまでも続くんだと、そう思つてた。だからあいつが旅に出るつて言つた時、初めて気づいたんだ。

永久に続く事なんてないんだってことに
(他のサイトにアップした、ポッド視点の小説です)

それは風のように突然で

生まれた時から一緒に居ることが当たり前だつたんだ。

失つて初めてそれが大切だつたと氣付かされる。

俺達三人が一緒に居る日々は永遠なんかじゃないんだと……。

* * * * *

「僕はこれから旅に出るよ」
デントはそう言いながら荷づくりを始める。

「マジで?」

俺は少し掠れた声でそう聞いた。

もしかしたら『冗談だよ』と微笑んでくれるような気がしたから……。

「うん。本気だよ。

僕はあの子 サトシ君に出会つて、本当に世界が変わったんだ」
静かな声で、さつきジムに挑戦に来たトレーナーの話を始めるデン
ト。

確かに今までの挑戦者にはいないタイプだつた。
誰か一人を倒せばいいのに、俺達三人と戦いたいと言つたと思えば、
相性の事よりバトルに出るポケモンの気持ちを優先していた。

苦しい戦いになつても、諦めることを知らない真っ直ぐな瞳……。

正直、俺もあのトレーナーのバトルにはぞくぞくした。

ジムリーダーになつて単調になつてしまつた俺のバトルに、新米トレーナーだった頃のバトルの高揚感を思い出させてくれたから。

「だから僕は旅に出て、僕自身を見つめ直したいんだ」
そう言って振りかえるデントの目には、抑えきれないほどの希望と期待とが見え隠れする。

「いつの、こいつの顔、久しぶりに見たな

あれは確か、初めてポケモンと旅に出る口だったか？
『待ちきれないよ！』と少し顔を紅潮させていた幼いデントを思い出す。

……。そうだ、こいつはこいつやつだった。

冷静に見えるけど、それは表面だけのこと、内側にあるのは熱い心。

俺達兄弟の中で、一番情熱的なのは多分デントだ。

抑えきれないほどの情熱は、彼の緑色の瞳を妖しく光らせた。

「 気を付けるよ？」

俺はそう言いながらポケモンボールを投げる。

ふわりとした放物線を描いて、デントの手の中にすばりと収まつた。

「 何？」

「餓別。たまには連絡くれよな

俺がにっこり笑うと、デントはそれを柔らかい笑みで返す。

ちくり。

俺の胸が少し痛んだのは、きっと俺だけ取り残されたような気がしたから

見上げれば白い月

デントが旅に出て数カ月。

三人でやっていた店は、今は一人で頑張っている。

「じゃあ、俺、コミ捨てるわ」

「ああ、お願こしますね」

「一言はもう言こながら、忙しそうにレジの清算をしていた。

「あ、ちゅうと寒いな」

外に出ると夜風が昨日よりも寒く感じられる。

ふと視線を上にみると、漆黒の闇に一つぽつんと浮かぶのは白い月。

薄く囁うような声を俺はぼんやりと見つめる。

「三田円」

不意に背後からコーンの声が聞こえて、俺は振り向く。

「デントも見てますかねえ」

慌てた俺とは対照的で涼しげな顔をしたコーンは、そつと静かに言った。

見上げるとそこには先ほど見た、どこか冷たそうな月はなく、替わりにほのかな優しい光に包まれている三田円。

ああ、そう言えば用つてこんなだったな。

三人で旅をしていたころ『もしジムリーダーになつたら』って話を
良くしてたつ。

……こんな用の出る夜に。

「やういえば昔、こんな用をみましたね」

ローンはそう言つと静かに笑つた。

月の光に照らされた顔は、本当に寂しげ見えて、俺は思わずローン
の頭を優しく撫でた。

「ポッード?

「あつと見てるよ、テントも。
だって俺達三人は三つ子なんだから」

エリと笑うと、ローンも俺につられて笑つた。

やう、俺たちはこつまで経つても三つ子で、
どこに居ても、向をしていても三つ子なんだ。

* * * * * おまけ『月に見えるせむの顔』 * * * * *

「デント、何やつてんの？」

少し小高くなつた丘で、デントは一人佇んでいた。

「ああ、サトシ。

「今夜は月が綺麗だと思つてね」

デントはそう言つと視線を月に戻す。

三日月の光は優しく降り注ぎ、どことなく幻想的に見える。
ふと思い出すのは、三人で旅をした遠い記憶。

「 そう言えれば、あの一人は元気かな……？」

小さく呟くその声は、夜の風に乗り、何処か遠くへと飛んでいった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5145r/>

君は月を見ているか

2011年10月9日17時02分発行